



〈カット〉 赤瀬川厚平

モスクワ || ウランバートル || 北京

北京行き国際列車はウランバートルを午前十一時に発った——三日にわたる縦断の旅から私は、中ソ・中蒙関係の現実を身をもって知ったのだ！

なか
じま
中 嶋
みね
お
嶺 雄

(東京外国語大学助教授)

I 三都縦貫所感

去る十二月下旬、海外学術調査計画の一環として単身日本を發つた私は、一研究者としてソ連、モンゴル、中国という三つの社会主義国の首都にそれぞれ約一週間ずつ滞在することができ、この一月中旬に帰国したばかりである。今回の旅行は、「中ソ対立の歴史的構造」にかんする私自身の研究課題を裏づけるためのものであったので、これら三カ国を同

時期に訪問できたことは、それだけに例外的な幸運であった。

四年半ぶりに訪れたモスクワでは、科学アカデミーの中国研究者との交流に日程の大半をさいた。そして、スターリン式ゴシック建築の偉容を誇るモスクワ大学本館が雪の深夜の静寂のなかにオレンジ色のイリュミネーションを点滅させ、新しき年の到来を告げる鐘の音を響かせたその瞬間の幻想的な光景を記憶にとどめたのち、元旦早朝の飛行機で私はシベリアに向った。厳寒のシベリアは悪天候のため、バイカル湖

北西二五〇キロのブラーツクで凍てつく一夜を過ごし、翌日イルクーツク経由でモンゴル人民共和国の首都ウランバートルに到着したのである。

雪に蔽われた草原の都市ウランバートルもシベリア以上の寒さで、日中でも零下十五度前後、夜間の戸外は零下四十度にも達し、そのうえ流感が猛威をふるって、すべての公式行事が中止されていたが、そのような日の一日、第二次大戦の犠牲者として昭和二十年から二十二年のあいだに、いわゆる外蒙の地で果てた約三千名の日本人抑留者の霊場を、郊外の雪の丘陵のただなかにジープで訪れたとき、その粗末な数多の墓石は雪に埋もれていたけれども、いま一人の日本人が、旅行者としてこの寒さに耐えることなどはあまりにも易き責務であると感じずにはいらなかった。

ウランバートルから北京まで一八〇〇キロの旅程は、三日がかりの汽車の旅であった。今日の厳しい中ソ関係、中蒙関係のもとで、その国境地帯を汽車で越えるということは、多数のハブニングに出会ったこととともに、まことに厳しいものではあったが、それだけに私にとっては印象深い旅となり、広大なゴビの砂漠そして内蒙古の地平を越えて、集寧、大同、張家口といった、地図のうえでいわば垂涎の的のような駅名を現実のものとし、待望の北京にたどりつくことができたのである。

北京は、一九六六年秋の文化大革命の激動期にそこを訪れ

て以来、八年ぶりであった。文化大革命期の北京は、いたるところを紅衛兵の熱狂的な大群が占拠しており、私が今回降り立った北京駅前広場などは、各地から集まった鍋・釜・スタイルの長征隊で埋まっていた。そのときの強烈な印象が残像となっていたためか、あるいは中国の公式紙誌が伝える「批林批孔」運動の高揚をつい文革イメージにだぶらせて考えていたためか、北京の今日にはあまりにも平静に感じられた。こうして北京では、八年間の時間的へだたりがもたらした変化の大きさに驚かされたが、同時に懸案の全国人民代表大会がすでに開幕もしくはその直前である状況を、いくつかの状況証拠によって具体的に実感することもでき、これまた私にとって貴重な体験であった。

そのような私にとつての一つの感想は、この三つの社会主義国を同時期に訪れて、同じく社会主義といながら、その差異があまりにも大きい反面、これらの社会主義社会が、社会主義的平等ないしは均一化傾向がもたらす諸矛盾、ある意味での恵平等の矛盾と一部階層の特権化といった問題での共通性を露呈しつつあることであって、この点は、「批林批孔」運動が叫ばれている中国社会においても例外ではないようだ。まさにそれゆえにこそ「批林批孔」運動が唱えられるのだともいえるようだが、「批林批孔」運動が、文化大革命のような熱狂的大衆運動になっていないことだけはたしかである。

右のような社会主義社会の現実が私にもたらした感懐は、

ユーラシア大陸のこれら三つの社会主義社会がもつイデオロギー上、生活上の敵しきやそして旅行者として感じる緊張感や拘束感とともに、かつて一九七〇年にレニングラードをふりだしにポーランド、チェコ、ハンガリー、ユーゴスラヴィアと東欧各国を順次南下したときにはほとんど感じられないものであった。この対照はたんに気候や風土の敵しきに由来するものであるばかりか、あるいは西欧的社会主義とアジア的社会主義の相違という文明的尺度にそれを求めるべきであるのかもしれない。

私にとってのもう一つの大きな感想は、これら三つの社会主義国を形成している主体としてのロシア民族、モンゴル民族、漢民族という、いずれも世界の歴史に巨大な足跡を残してきた三民族の強烈な民族性とそれらに固有の文明の差異にかんするものであり、その民族的・文明的な摩擦の大きさといった問題である。そして、このような差異を有する三つの民族国家がユーラシア大陸を縦貫して併存していること自体がもつ歴史的意味の大きさは、われわれ日本人に理解しがたいものであるような気がする。

今日、一口に中ソ対立というが、中ソ両国はモンゴル国境を含め七四〇〇キロに近い世界最長の国境線をはさんで対峙しているとはいえず、それぞれの国家を形成する主体としての漢民族とロシア民族は決して背中あわせに居住してきたわけではなく、それぞれの首都は地球儀を三分割できる程の遠距

離に位置している。にもかかわらず、およそ近三百年來の漢民族とロシア民族との出会いが、きわめて摩擦の多いものであったことの大きな原因としてこそ、まさに両者の中間に位置してきたモンゴル民族の存在を指摘することができよう。つまり、漢民族もロシア民族も、いずれか一方が他方を完全に制圧したことはなかったのであるが、「歴史の悪夢」としての歴史的イメージのいたずらとでもいうべきか、両民族にたいするモンゴル帝国の制覇という歴史的体験が、両民族の民族感情を宿命的に刺激してきたように思われる。

そして、漢民族にとっては強大なロシア民族国家の存在がモンゴル帝国のイメージとだぶった「北からの脅威」としてつねに感ぜられ、ロシア民族にとっては、「南東からの脅威」を避けるために、強固に統一された漢民族国家の存在を欲しないという感情をかきたててきたのであり、この点は、これら両民族が社会主義国家を形成したのちにも一貫しているように思われる。それゆえにこそ、モンゴル民族が弱体化した近代以降は、漢民族国家とロシア民族国家との中間に存在したモンゴル民族の広汎な居住空間（それは今日のモンゴル人民共和国、中国領内モンゴル自治区、ソ連領ブリヤート自治社会主義共和国のみならず、東は中国領黒龍江省の旧ホロンバイル地方から西は新疆にいたる広大な地域である）が、両者のあいだの中間地帯ないしは緩衝地帯として、しばしば中ソ双方のナショナリズムや国家エゴイズムの激突の場となり、勢力角逐の舞

台となつて、中ソ関係の歴史的ダイナミズムを形成してきたのであろう。今回の旅行を通じて現地を確認することのできた問題点の一つは、以上のようなことであつた。

第二の問題点も、やはり中ソ兩國の中間地帯としてのモンゴル民族の居住空間にかんするものであるが、それはとくに、この広大なモンゴル民族の居住空間が歴史的にきわめて流動的な状況にあつたことのもつ意味についてである。今日、モンゴル人民共和国として、いわゆる外モンゴルの地に限定された主権国家を形成しているモンゴルが、辛亥革命期の独立宣言の時代から一九二一年のモンゴル革命を経て中ソ対立下の今日にいたるまで、つねに中ソ双方の利害の犠牲に供されようとしてきたことについては、すでに知られているところである。またこの中間地帯の流動的な状況に乗じて、かつての滿蒙独立運動・滿蒙領有論や大モンゴル統一運動が日本の関与のもとに生じたことも周知のところである。すなわち、川島浪速・芳子父子の活躍や関東軍の石原莞爾の構想などをはじめ、檀一雄作『夕日と拳銃』で知られる伊達順之助や尚旭東こと小日向白朗など有名な馬賊や大陸浪人の跳梁する山中峯太郎描くところの『実録亜細亜の曙』的世界がかつては軍国日本の青年の夢想をかきたててきたのであつた。

このようなモンゴルの世界は、連綿と果てしなく続くゴビの砂漠や草原地帯が国境といつても境なく、もっぱら遊牧騎馬民族の自由な移動空間であつたこととともに、たえずその

境界さえ流動的な中間地帯として存在しつづけてきたのであり、この流動的な中間地帯の宗主権をめぐって、中ソ兩國は、近くは辛亥革命の時期以来たえず争つてきたのであつた。

一九三六年に毛沢東がエドガー・スノーとの対談のなかで、「中国で人民革命が勝利するとき、外モンゴルは自動的に中華連邦の一部になるだろうと思う」（『中国の赤い星』）と語つたことは、今日でもモンゴル側とソ連を強く刺激している言葉であるが、外モンゴルの宗主権をめぐる問題は一九四五年のヤルタ密約、同年のスターリンと蔣介石との中ソ友好同盟条約、五〇年のスターリンと毛沢東との中ソ友好同盟相互援助条約を経て五四年のフルシチョフ訪中時の中ソ会談にいたるまでつねに中ソ双方のイシューとなり、今日でも台湾政権はモンゴルにおける自己の主権を主張しつづけている。このように現代モンゴルはたんに中ソ兩國の谷間に存在する国家であるばかりか、歴史的にもきわめて流動的なこの中間地帯こそ、あたかも漢民族という巨人とロシア民族という巨人のあいだに広げられた一枚の絨毯のような存在でありつづけてきたのであり、この絨毯を今日、ソ連が自己の側に引き寄せてしまつてゐるがゆえに、中国の反撥は、また深まつてゐるのではなからうか。私は約二日間わたつて窓外に続くゴビの砂漠の、しばしば視界に入る駱駝や羊の放牧以外に変化の乏しい垣々たる地平線をあかずながめ、壮烈な夕日の美しさを險に滲みこませながら、この広大な地域の地政学的意味

を以上のように直感せざるを得なかつた。

このようにして存在してきたソ連、モンゴル、中國の國際關係は、だからレーニン主義的な國際主義の精神を軽く押し流して今日にいたつているのであり、今日の中ソ關係、中蒙關係は、このような歴史のうえに形成された必然だともいえるのである。もしも、そのような必然を揺り動かす力を探し求めようとするなら、その力こそ、流動する國際關係全体の動きであり、また、それぞれの社会主義國內部のいわば「深部の力」にほかならないように思われる。

II ソ連社会の潮流

この点で四年半ぶりに訪れたソ連は、いうまでもなく世界の超大国、社会主義の最先進国でありながら、いわゆる西歐化への民意の流れがさらに進んでいるように感じられた。とくに、われわれ先進工業民主主義國の内部で批判の対象となりつつある物質的な富の豊かさ、高度な消費生活への憧憬は、もはやとめどもない潮流であるようだ。

この点では、東歐諸國へのコカ・コーラの「侵入」が西歐化への一つの指標であつたように、ソ連当局が昨年、アメリカからのチューインガム輸入を認めたことは、將來、意外に大きな意味をもつことになるのではなからうか。モスクワに滞在していて、ルーブルの実勢がいかに弱いか、外人向けのドル・ショップ・ペリョースカでは高級品が比較的廉価で買

えることもあつて一般民衆がいかにドルを入手したがつてゐるかは、いかがわしいヤミ・ドル買ひに出会ふまでもなく、たちどころに歴然とする。ドル危機や石油ショック以来の資本主義經濟の体制的危機を説くソ連政府やソ連共産黨の公式見解がいかに齒の浮くようなものであるかを、ソ連市民は実践的に熟知しているのであらう。

この点に關連して驚いたことの一つは、ニュー・イヤーの前後であつたためか、日本製の綺麗なカレンダーが大変な人氣を呼んでいることであつた。ソ連といへば *Socialism for Waiting* の國であるから、今回の私の旅行に際してのインツァーリストの接待ぶりもこの例にもれず、じつと我慢して待つていなければならぬことが多かつたが、日本製のカレンダーがあれば、事はまことにスムーズに運ぶようである。さすがエコノミック・アニマルといわれるだけあつて、日本のビツグ・ビジネスは各社ともソ連向けの大きな美しいカレンダーを大量に送りこんでいるようであり、私がたまたま空港で目撃した場面でも、某有名商社の出張員がセミ・ヌードの大版のカレンダーを大量に持ちこんでいた。そして空港の待時間にあいだじゅう、その出張員はグラウンド・ホステスに取り囲まれてカレンダーを所望されつつづけていたのである。

ここに示した通俗的な事例にも明らかのように、今日のソ連社会は、いま中國の批判をそのまま受け入れることはしないにしても、「資本主義の復活」と見られるような傾向を、

現象的には随所で示している。このような潮流のなかで、イデオロギーからの解放がむしろ社会的進歩への暗黙の合意にさえなりつつあるようであり、ブレジネフ演説が始まると市民はTVを消してしまおうといった現象も、もはや驚くに値しないようである。こうした西歐化への志向と脱イデオロギー傾向が底流するがゆえに、今日、ソ連の指導者はタテマエと本音の乖離を感じとりながらも、タテマエとしてのイデオロギー的教化を強めつつあるように思われ、軍部やクレムリン内部のタカ派が勢力を増しつつあるらしいというクレムノロジストの分析は、この点での射ているのかもしれない。

そのような状況のなかで、知識人の苦惱や戸惑いが大きいことはいうまでもない。だから海外で発表されたソルジェニツィンの作品が、モスクワ大学の多くの学生たちのあいだを順回して読まれていることも、いわば必然の趨勢だといえよう。反体制知識人についていえば、今日の体制を社会主義の必然とみなし、十九世紀的ロシアの古きよき時代への回帰を期待したソルジェニツィンの立場を強く批判している科学者サハロフや、反体制マルクス主義の立場からソ連社会の内部的変革を訴えている歴史家ロイ・メドヴェーデフなど、厳しい締めつけのなかでソ連にとどまっているこれら反体制知識人への共感も、意外に幅広いものがあるようだ。

もとより、ソルジェニツィンにせよ、サハロフ博士にせよ、ロイ・メドヴェーデフにせよ、これら反体制知識人に共

通しているのは、これらソ連の反体制知識人に共鳴しつつ他方では中国の今日の発展方向に社会主義社会救済の道を見出そうとするわが国の一部知識人とは決定的に異なつて、彼らは、今日の中国を、まさに彼らもつとも激しく批判しようとするスターリン時代の中国版だとみなしていることである。このような見方は、ソ連の中国研究者にとつても共通したものであることはいうまでもないが、ソ連の中国研究者のなかにも、現体制擁護の立場に立つ体制的な中国批判の潮流と、ソルジェニツィン事件やチェコ事件についてのソ連政府の立場に批判的であるとともに、よりリベラルでアカデミックな中国批判に徹しようとする潮流とが分離して存在していることを指摘しておく必要がある。

III モンゴル社会主義の現実

中ソ両大国のはざまに位置するモンゴル社会の状況は、草原と包^ポとか、遊牧社会主義国家とかいう日本人のロマンチックな幻想にもかかわらず、生活の面でも、イデオロギーの面でも、きわめて厳しいものがあるように思われた。日本人のモンゴル像がかなりあいまいなものであることは、ある程度やむをえないとしても、帰国後、ある新聞社の老練記者から「モンゴルはソ連領ですか」と質問されたのには、いささか驚いた。日本とモンゴルとが一九七二年二月に国交を樹立したなどについては、当時の日中国交ブームのなかでほと

んど忘れ去られている事実ではあるまいか。一方でわれわれ日本人は、かつての山中峯太郎の作品の世界や「月の沙漠」のイメージによってのみモンゴルを考えやすいと同時に、一部においては草原の革命国家というこれまたかなり主観的なイメージにとらわれているように思われる。そのいずれもが、日本人のロマンチズムを満足させる対象としてのモンゴル像でしかないというのが私の実感であった。

そして、生活面とイデオロギー面での激しさの一つの背景は、毛沢東をあげしく非難しブレジネフ礼讃に努める今日のモンゴルの基本的外交方針（L・リンチン外相の論文「人民モンゴルの対外政策」『国際生活』一九七四年十二月号、参照）にもかかわらず、この国にソ連の滲透力があまりにも大きすぎることに由来しよう。市内を歩く外人がほとんどすべてロシア人であることはもとより、モンゴルに進駐しているソ連兵があまりにも目立ちすぎる。この点では「モンゴルはソ連領ですか」という質問は、皮肉にも正鵠を射ているともいえるわけで、たとえば中央アジアのウズベック共和国などと比較してみても、よくいわれることだが、「モンゴルはソ連の第十六番目の共和国だ」という評価は、すくなくとも現象的にこれを見るかぎり首肯せざるを得ない。そもそも、長期にわたる漢人支配にもかかわらず、漢字文化圏に導き入れられることを頑なに拒否してきたモンゴル人が、今日、モンゴル文字を棄ててロシア文字の世界にいともしまったかに思

われる現実を、どのように考えたらよいのであろうか。

これにたいして、現在、中国の影は、ウランバートルに約六千人住んでいるといわれる中国人（旅蒙華僑）以外には皆無に等しく（なおモンゴル全土には一万二千ないしは二万の中国人が居住しているという）、あとは中国大使館と、これら中国人のための週一回発行の中国語新聞『蒙古消息報』が存在しているほかは、ウランバートル市内の数少ない本屋の一つが、モンゴル語、ロシア語、英語、中国語でその看板を表示するとき「書」という字を使っているのが目につくだけである。一方、歴史博物館には清朝統治の暴虐ぶりを示す生々しい絵が、首枷や足枷とともに展示してあり、市民は中国が建設途中で援助を中止したデパートを指さして、中国の裏切りを非難する。いわば独立以来の反清反漢感情が中ソ・中蒙対立以降の今日の中国への反撥と重なっているのであるが、こうした状況のなかで在留中国人にたいする感情は冷やかであるようであり、中国人の多くは、最下層の生活を強いられている。

こうした対中国人感情は、同時に、今日、中国領内にある内モンゴルの同胞への同情となつて表出する。内モンゴルのモンゴル人を中国人が抑圧しているという非難は、モンゴルの公式見解としてもしばしば散見されるものであるが（たとえばオ・チュルウン「モンゴル・中国関係発展の二つの路線」『極東の諸問題』第三卷第三号）、それだけに解放後の中国において中国共産党の内モンゴルでの代表者となつたモンゴル人指導者

ウランフ（文革前の内モンゴル自治区主席で文革で失脚したが、のちに復権した）にたいする感情もよくない。内モンゴル出身だというあるモンゴル人は私に、「ウランフは内モンゴル人から浮き上った老八路だった」と語っていた。

ところで、あらゆる分野にソ連の影響力が滲透し、昨年十一月の建国五十周年祝賀にはブレジネフ・ソ連共産党書記長を迎えてソ蒙友好を再確認しあつたばかりのモンゴルにおいて、一般民衆の対ソ観はどうであろうか。このような質問を一旅行者が直接モンゴル人に向けてみても、そこに個性的な答を期待することはできない。だが、一般民衆が必ずしも対ソ好感情をもっていないであろうことは、たとえば、ソ連のインツォリストと提携しているはずの国营旅行社ゾールチンのオフィスに行つて、ことソ連に関係する事務をたのむとたちどころに「拒絶反応」を示されることや、税関吏もソ連兵に対する点検をモンゴル人とあからさまに差別して厳しくしてみせることなどによつても推察できるような気がする。

また、この国で日本にたいする関心と期待がとみに高まり、アメリカにたいする関心も増大しつつあることからもある程度は推測できよう。中ソ両国のはざまにあることの厳しい宿命をモンゴルの民衆は、こうした方向において打開しようとするのであろうか。赤裸々な対中悪感情に救われている点もあろうが、対日感情は大きく好転しているようであり、ノモンハン事件（一九三九年）の悪夢を彼らは慎重にも語らう

とはしない。あるモンゴルのインテリ女性には、「モンゴル人は日本をアジアのリーダーだと思つている。その日本との経済・文化交流を強く望んでいます」と語っていた。そのような風潮を反映してか、若者のあいだには日本語熱がたまつているようだ。アメリカは、たとえば、夏の草原を求めて例外的にこの国を訪れる団体観光客がある程度だそうだが、ウランパートル・ホテルでの一夕、がらんとした食堂のホールに客は十名にも充たないのに、舞台上にバンドがあらわれてジャズばかりを演奏していたのは驚いた。もしもこの国が日本との窓をさらに開き、アメリカとの交流も始まつたとき、そこにどのようなリバーカッションが生じるであろうか。

もとより、現段階では西側との交流の窓は狭い。いわゆる西側の外国人がこの国を訪れること自体、国交が樹立されたわが国や東南アジア諸国からの場合でもそう簡単ではない。私は、モスクワでモンゴル人国査証を取得する際、数多い質問項目のなかに「あなたはモンゴルについてなにか書いたことがあるや否や。いつ、どんな出版物において」という項目があるのを見て、人的往来の重い扉がある程度予想はしていたが、つねに番兵が立つているホテルの机の上には、なんと二十二項目におよぶ注意事項が書かれているのを知つた。

このような状況であるためか、カメラについては、また格別に厳しい。私自身もまず入国時の税関からカメラのトラブルに出会つたが、このような厳しさは私にかぎらず、モン

ゴル政府に招かれた外国人記者の場合でも同様であるらしく、また、モンゴルの紹介者として著名なオーエン・ラティモア教授でさえ、市内の日曜青空市場や市の周辺に密集する包の集落など「素顔のモンゴル」を写すことはできないようである。そして、この日曜青空市場こそ、モンゴル人の生活をそのまま映しているのだが、空瓶、靴の片方、古いライター、手づくりの箒や小道具類などが古板のうえに数点のせられていただけの露店が並ぶこの市場には、寒空に人が群れていた。市内に唯一のデパート、そして肉屋や八百屋をのぞいてみても、この国の消費生活の厳しさがうかがえるが、草原の牧民であった彼らにたいしての私の基準の方にそもそも問題があるのかもしれない。もつとも生活の物質的豊かさを保証することにもつとも怠惰であるのが、東西を問わず、現実の社会主義でもあろう。

もつとも、このような生活面での厳しさについては、中国側が、COMECON傘下のモンゴルをソ連が「搾取」しているからだとしばしば非難しているところでもある。この点についての評価はさておいて、発展途上のモンゴルにとっての深刻な問題の一つは、わが国の国土のはげ四・五倍の面積に約百三十万の総人口しか存在しないことがもたらす労働力不足の問題である。徹底した人口抑制策をとっている中国とは対照的にこの国は、社会福祉の増強や勲章と奨励金によって、人口増加政策に懸命のようだ。その多くが日本人抑留者

の手によって建設された市内の主要建築に加えて徐々に都市づくりがすすみ、教育に力が注がれて学生や教師が優遇されている姿などは、たしかにこの国の将来に明るい希望をつながせるであろう。

モンゴルについて素人の私が知りたいと思つたことの一つは、ジンギスカンにたいする評価ないしは汎モンゴリズムにかんする問題であり、もう一つはラマ教の現在の姿についてであった。ソ連は今日、あらゆる意味でモンゴルにナショナリズムが擡頭しないよう指導しているかのようであり、ジンギスカンについてはまったく否定的な評価をおこなっている。この点は現ツエデンバル政権も同様であり、一九六二年には、ジンギスカン生誕八百年祭をめぐってトムルオチル人民革命党政治局員らが民族主義者として追放されたこともあった。私は、ウランバートル大学の学生に青年たちのジンギスカン像を聞き出してみようと試みたが、「他民族を抑圧した支配者」という答しか得られなかった。「中国では今日、秦始皇を礼讃しているばかりか、ジンギスカンを中国の歴代英雄としてたたえているではないか」と「挑発」してみても答は同じであった。雄大なロマンと美しい韻文、そしてモンゴル民族の道徳律でもあったといわれる民族的古典『元朝秘史』について質してみても、「温古知新」どころか、当時の社会構造を分析する史料として扱っているという無味乾燥な答が返ってきた。このような、いかにも公式的な反応につい

ては、この国の革命史をひもといてみたとき、「モンゴル人民革命党はコミンテルンの共鳴組織であった」(ア・イ・カルトウノワほか「コミンテルンとモンゴル人民革命党」『極東の諸問題』第三巻第四号)というソ連側の最新の定義づけにもかかわらず、人民革命党そのものがつねに大国の犠牲に供されながら、革命主体内部に、その出発の当初からチヨイバルサン独裁時代を経て今日のツェデンバル体制にいたるまで、たえず激しい党内闘争と肅清をくりかえしてきた経緯についての心が閉ざされてしまふのと同様、われわれ外部の者には理解しがたいものである。私は、市の中央部にある科学アカデミーの立派な建物の正面に、巨大なスターリンの銅像が聳え立っているのを知って強い衝撃を受けた(おそらく、このようにスターリン像が依然として聳えているのはアルバニアとモンゴルだけではなからうか)。モンゴル革命の英雄スフバートルと並ぶべき革命家の一人で、科学アカデミーの源流を創出した学究でもあったブリヤート・モンゴル人のジャムスラン(A・J・K・サングダース『モンゴル人民共和国』参照。なおジャムスラン(ジャムツァラーノ)の生涯については、田中克彦『草原の革命家たち』(参照)が今日でも民族主義者のレッテルをはられて批判されているのと対照的に、その科学アカデミーの正面にいまなおスターリン像が聳えていることについては、これまで私が接したわが国のモンゴル紹介書からは注意深く割愛されている。ともかく、モンゴルにとっていま求められるべきものこそ、まさ

に新しいナシヨナリズムだとはいえないだろうか。

ラマ教については、状況が少し異なるようであり、庶民の葬儀にはやはりラマ僧が立ち会うようである。私はイルクーツクからの機内でモンゴル人青年から友好の印にいつてモンゴル仏教協会一九六一年発行の有名なラマ廟ガンダンテチンリン(慶寧寺)の写真集とラマ教の極彩色のお札を差し出されたが、この青年は敬虔なラマ教徒なのである。日曜日に市内のガンダン廟を訪れてみると、ラマ僧たちはチベット語の教典をひろげて無心に読経をつづけており、中年の女性が独得の礼拝用鉄板のうえに身を伏しては立って憑かれたように拝んでいた。もとより、現代のモンゴルは社会主義国であつてラマ教の世界ではない。だが、ラマ教がそこで死滅していかないことだけはたしかなようである。私はガンダン廟の小さい丘から地平の彼方を見やりつつ、この地とチベットとの交流の歴史というその偉大な過去についての想いを馳せ、今日ではその消息さえ伝えられることの少ないチベットを内部に収めている中国へ、これから旅立とうとしているわが身を、しばし寒風にさらしたのであつた。

IV 中ソ対立下の国境を越えて

北京行きの国際列車はウランバートルを午前十一時に発つた。八つのコンパートメントから成る一等寝台車(軟臥車)の乗客は、私とブルガリアの外交官の二人だけ。この列車は中

国製でS L フランが喜びそうな蒸気機関車に牽引され、三人の中国人服務員が乗車している。二等寝台車の方にはモンゴル人やロシア兵が多いが、すくなくとも外国人のための車輛は、こうして最初から「中国の世界」に入るものであり、このことは私にとつてあらゆる意味で救いであつたが、モンゴル側からみれば、自国の領土を「中国」が走るように思えるのであろう。この点にこそ、のちに出会つたハブニングのそもそもの背景があつたように思われる。

どこまでもつづく緩やかな起伏の丘陵と草原。夏から秋にかけてはさぞかし美しいだろうと思うが、そうした窓外の風景を観るためには、太陽がふりそそぐ日中だというのに二重窓の外窓の内側にできる水をたえず手で落さねばならない。

約一時間も走ると左手に無線アンテナの基地が見え、以後、国境までパラボラ・アンテナの基地やレーダー基地、各種軍用基地があちこちにあつて、いたるところにソ連兵が進駐しており、中ソ軍事関係の現実の一端を感じさせる。また、ナライハ、マニト、チョイル、サインシャンドといった比較的大きな駅の周辺や、ときには草原のただなかをソ連製の軍用トラックが走り、ゴビの砂漠の上空を小型飛行機が旋回していることもしばしばであつた。北京へ到着してから手にすることのできた新刊雑誌『歴史研究』創刊号に載つていた中ソ関係についての論文、史宇新「デマ製造者への反駁——中ソ国境の若干の問題について——」によると、モンゴル駐留ソ

連軍の撤退、中国へのスパイ送りこみの中止などを中国側は強く訴えているが、私が目撃した現実からしても、この点で中国側の主張には根拠があるように思われる。

だが、右のような現実にもかかわらず、三日間の旅を通じて、モンゴル国境で中ソが最近軍事紛争を演じたような緊張感とはほとんどなかつたといつてよく、右のような状況はすでに恒常的な現実であることがよくわかる。もとより私は長大な国境地帯の一线をある一日通過したにすぎないのだが、すくなくとも、しばしばセンセーショナルな報道をおこなうイギリスの『デーリー・テレグラフ』紙（七四年十二月十七日付）が昨年十一月に中・蒙国境で五回の軍事衝突があつたと伝えた報道については、中ソ双方がそれをたちどころに否定したとおり、意を含むスベキュレーションではなからうか。この点については、私がウランバートルで意見を交した新華社記者もきつぱりと否定していた。また、いわゆる国境防衛が叫ばれている中国において、内モンゴル自治区の沿線において人民解放軍の隊列や生産建設兵団の姿をまったく見かけなかつたことも記しておくべきであろう。そもそも、もしも国境地帯が現実には戦争の危機にさらされているのだとしたら、私が国境を通過することさえ不可能であつたらう。

私はモスクワのある日、雪のノヴォデヴィチ修道院墓地を訪ねて、一九三〇年代前半の中国共産党最高指導者であり、一貫した親ソ派として（そして中国共産党からは今日でも激

しく批判されている反党分子として、昨年三月にモスクワで逝つた王明の遺体が要人の墓地として有名なこの墓地に手厚く葬られてゐるのを知り、中ソ対立の根深さを改めて再認識せざるを得なかつたが、だからといって、中ソ関係の現状をあまりにも固定的に考えることはできないように思う。この点は「毛沢東以後」の中国を考えるとときの決定的なポイントであり、また、今回の訪ソでもソ連の指導者や中国研究者が「毛沢東以後」の時代の中ソ和解にいかに大きな期待をつないでいるかを再確認することができた。

この点に関連して、いささか衝撃的な事件に私はウランバートルで出会つた。中国入境査証の件で一月六日午前十時に中国大使館を訪れると、張偉烈中国大使が玄関に立つてゐた。私の中国人境にかんする好意に謝して玄関を入つたその瞬間、そこへスミルノフ・ソ連大使が二人の随員を伴つて来訪し、あたふたと奥へ消え去つたのである。この「中ソ会談」は、おそらく張大使着任後のリターン・コール（表敬訪問）であつたと思われるが、しかし、ウランバートルのように、西側記者が存在しない「孤島」のような場所こそ、中ソ交渉の絶好の舞台になり得るのかもしれない。

汽車がドルノ・ゴビの砂漠地帯に達するまでには三時間半を要した。点在する駝駝や馬捕棒を脇にした牧民の姿は、さすがに情緒をさそうが、それ以外は単調な光景がつづく。中国人服務員はトランプに興ずるか雑談、ときたま天津人民出

版社刊の『龍灘の春色』と題する小説を読んでいて、文革時の深圳―広州間の車中とは、あまりにも対照的である。林彪が反毛陰謀を企てて失敗し、ソ連に逃亡の途中で墜死したといわれるウンデルハンはこのあたりから東方二〇〇キロの地点であるので、のちに中ソ関係、日中関係、「批判批孔」運動などについてすっかり打ちとけて話し合うことのできた中国人服務員にここで質問してみると、「そのとおり。反賊・林彪はウンデルハンで死んだ」と左の彼方を指さす。もつとも、林彪事件については、モンゴル側は、墜死者のなかに林彪はいなかつたというモンツァメ通信の公式見解を主張し、林彪が北京で死んでいることをにおわせようとしている。今回も、そのような主張を何回か聞いた。女性のハイヒールがあつた等々の話もかねて耳にしてゐたとおりであつた。墜落機の残骸は今日でも砂漠のなかに散らばつたままであり、中国側の遺体引渡し要求にたいして、モンゴル側が遺体の名前を質したところ、中国側は引渡し要求をひっこめてしまつた、とのことも現地で聞いたが、もとより真相は謎である。今日の情報化時代において、林彪事件ほど謎の残された事件も少ないが、同時に、事件にたいするモンゴル・ソ連側と中国側との見解は、こうして一八〇度くらいがっているのである。この点は、中国を訪れると、一九六〇年のソ連の援助停止と技術者引揚げをソ連の裏切りとして強く訴えられるのにたいし、モンゴルに行くとい九六四年の中国の対モンゴル援助停

止と技術者引揚げを中国の無慈悲な仕打ちとして強く訴えられることと同様、やはり多くを考えさせられるところである。

このようなことを反芻しつつ、一種の臨場感にとらわれながら六時間後にはチョイルに着いた。この駅頭にもソ連兵が多かったが、私はひたすら、砂漠の地平線に沈む夕日の茜色とはこのように美しく荘厳なものかと感嘆しつつ、雄大な暮色の変化を約一時間にわたって楽しみ、やがて瞬時の暗闇のあとに輝きはじめた星の光の強さに我を忘れたのである。

すっかり仲良しになった中国人服務員は、手づくりの水餃子を出盛りにして持ってきてくれた。国境まで三分の二の行程を走って基地の街サイインシャンドに着いたのは夜九時。モンゴル兵とソ連兵があわただしく荷物の積みおろしをしており、荷を満載した軍用トラックが闇のなかに消えてゆく。

翌朝は六時半に起きた。窓外にはまだゴビが続くが、まもなく国境から二キロの駅ザミンウデに到着する。ザミンウデ駅は国境の駅だけあって立派であり、モンゴル語と中国語で駅名が表示してある。約二時間を要した国境での税関の検査は、伝え聞いていたとおり、まことに厳しいものであった。乗客の他の一人は外交官であり、検査の対象になるのは私一人であるためか、その厳しさは、筆舌に尽くしがたいほどであった。やはりフィルムを没収されたが、結局ひとまずは所持していた中国地図を没収されただけで済んだ。もつともユーモラスな遺漏もあるものである。中ソ関係につい

ての私の貴重な論文原稿を携帯していたため、それを没収されはしないかと恐れたが、見ると日本文の原稿を上下逆さにして読んでいるではないか。ところが、そんな場面があつてホッとしたのも束の間、もう出発時刻だというのに、今度は中国語の通訳を含む七人の税関吏があわただしく乗りこんできて、部屋のドアを閉め、手持ち外貨の厳しい検査にはじまって中国行きの出発の理出の訊問など、さらに約一時間にわたって検査されたのである。その態度たるや敵地に乗り込む裏切り者を扱うかのようなものであったが、最後には日蒙友好の必要性を諄々と説くと、結局は、日蒙友好のために特別に出境させるといつて許され、七人の官吏と次々に握手をした次第である。いわば「小国の大國主義」といったものがそこには露呈していたが、モンゴルの厳しい現実とその歴史の経緯を考えれば、そればかりを非難するわけにはゆかないのかもしれない。国境には石標があり、小さな小屋に自動小銃をもった兵士が二人警備していたが、もちろん境界線がめぐらされているわけではない。

こうしたハブニングのち中国側の国境駅・二連の駅頭に降り立ったときには、まさに空気の稀薄な世界から大気のかへ戻ってきた感じであつた。モンゴル側とはその風景も異なつて、駅の周辺には丹念に植林がしてあり、送電線の電柱もすつかり立派になつてゐる。街の様子も活気に充ちてゐるうえに、土壁にカワラ屋根の中国式住居が軒を連ねてゐる。

駅長や辺防警察官の手厚い歓迎を受け、モンゴル側とのあまりに大きな対照にいまさらながら深い安堵感を覚えたのであった。中国領内モンゴルは、あらゆる点で漢人化が進んでいて、この点でモンゴルを「分断国家」とみなすことはもはや不可能だといえよう。漢人農民の入植と放牧地の農地化には、すでに歴史の重い軌跡が刻みこまれていている感じであつた。

こうして私は、八年ぶりに中国を訪れることができたのである。中国人服務員は、私がモンゴル税関で調べられて以来、なお一層親切にしてくれ、汽車は二連駅に二時間半ほど停車したのち正午にそこを出発した。これから明朝まで再び砂漠を走って一路北京へ向うのである。北京までの一日、車外の光景や駅頭の雰囲気を見ても、文革時のような緊迫感はまったくなく、毛沢東語録の朗読、毛沢東讚歌のかまびすしさには一度もぶつからなかつた。朱日和、白銀哈爾を過ぎると低い山が見えてくる。土木原台あたりになるとトラクターによる農地化の跡が見え、再び暮色を堪能したのち、集寧着は夜八時半であつた。深夜に大同、午前四時に張家口を通過し、万里の長城の八達嶺で朝を迎え、北京郊外の冬の農村風景を久しぶりにまのあたりにすることができた。以前はまったく見かけることのできなかつた耕耘機を何台も見かけ、そのかわり農家の壁のスローガンがめつきり少なくなつていてその変化に驚きながら翌朝九時五十分、私は北京駅頭に降り立つたのである。

V 北京再訪

すでに車中でもある程度は予想されたとおり、八年ぶりの北京は、まったく平靜であつた。それにしても八年間の変化は大きい。モンゴル経由で、しかも前回の訪中が文革のピーク時であつたためか、王府井の東風市場や東單の市場の品物の豊富さ、自動車の増加、市民の人民服や自転車が多くが新しく綺麗になつてゐることなどはすぐに目につくところであつて、まさに別世界のようにあつた。一方、私が感じたその落ちつきぶりは、毛沢東語録や毛沢東讚歌がまったく目立たずに、「批林批孔」運動の学習風景にも一過問の北京滞在中ついにぶつからず、日曜日の頤和園や故宮、前門外の街並などが、ごく普通の遊覧客で賑つてゐたことなど、文革期のような「政治第一」の社会的雰囲気がつかり消え去つてゐたことにも由来するものである。「紅衛兵」「紅小兵」「紅哨兵」といつた腕章の少年少女も見かけはするが、彼ら紅衛兵は文革時のような政治的役割を担うものではなく、いわば模範生ないしはポイズスカウト、ガールスカウトのような感じのものである。それだけに、外資にたいする過度のサーヴィスもなくなり、手鼻をかんだり、痰を吐く人も多く見かけるなど、すべてが平常化してゐたといつてよい。

もとより、政治家などのお歴々が北京空港―北京飯店―天安門前広場―中南海などを万里の長城や明の十三陵といった

観光コース、指定された人民公社などともにあわただしくまわつて中国の現状報告をするのちがつて、私の場合は、単身で滞在することができたので、時間の許すかぎりあちこちを歩きまわつてみたが、しばしば伝えられる北京の威風堂堂の街頭風景の反面、首都北京といえども、一步目抜き通りから入つた胡同や下町には、表向きの表情とは比ぶべくもない断絶が即座に感じられて心が疼く思いであり、中国がまさに発展途上国であることを知らされるのである。

また、かつてはわが国の对中国文化侵略の拠点であり、黎元洪総統や作家・胡適の居宅でもあつた東廠胡同の一角は、現在、中国科学院近代史研究所になつてゐるが、この胡同の風情なども、十本あつたと伝えられる槐樹が六本に減つてゐたことを除けば、おそらく往時のままであらうと思われる。

ところで、わが国には報道されていないが、北京図書館、中国科学院圖書館、革命博物館、歴史博物館、人民革命軍事博物館、中国美術館、民族文化宮などが今日も閉館されたままであり、また中南海を望見できる市内の名所、北海公園や景山公園が今日立入り禁止であることなどは、日中国交樹立後にも日本人は一般民衆と友達つきあいをするこゝがまつたく不可能であり、食堂、ホテル、住宅などもすべて外国人専用で「隔離」されてゐることともに、やはり政治と思想の面での冷厳な現実を示すものであらう。そして政治面でのあの偉風や厳しさと民衆の生活実態における脱政治傾向の著しさと

のこのギャップこそ、つねに文化大革命や「批林批孔」運動のようなキャンペーンを必要とする大きな背景となるものであらうが、このような断絶を、偉大な指導者にたいする民衆の信頼の強さのゆえとみなすべきか、それとも、中国民衆に伝統的な政治観、つまり「帝力いづくんぞ我にあらんや」といつた特性にそれを求めるべきか、また八年間の成長を文革と「批林批孔」運動の成果とみなすべきか、それとも、発展途上国の当然の前進とみなすべきかといつた点については、やはり早急な結論をくだすことはできない。

ところで、私が北京に滞在中、懸案の全国人民代表大会の開催が迫つてゐる兆候は、とくに帰国前日の一月十三日の時点で明瞭であつた。参考までに、そのような状況証拠を列挙すると、次のとおりである。一、そもそも一月九日に北京駅へ到着した際、国境の二連駅では一輛しかなかつた一等寝台車が二輛に増えており、その車輛からは地方幹部らしい乗客が降り立つた。おそらく集寧、大同あたりからの乗客であらう。二、北京滞在中、しばしば人民大会堂の内部に電光が点つてゐることを目撃し、番兵が多いのに気がついた。三、一月十三日には、民族飯店に投宿してゐた日本人商社員が全員、私が泊つてゐた新僑飯店へ移されてきた。四、友誼賓館に地方からの投宿客が増えた。五、香港などの華僑代表がすでに到着してゐるらしいことを耳にした。六、帰国の前日、外国人がほとんど訪れない旧鼓楼大街一帯を散歩すると、北

京では私の目撃したかぎりこの一角だけに糊あとも生々しく赤、黄、緑のステッカーが張り出されており、そこには「用实际行动迎接四大招開」（「实际行动によって第四期全国人民代表大会の開催を迎えよう」というスローガンがあった。

こうして私の帰国後、一月十三日から十七日まで懸案の全人代が十年ぶりに開催されたことが、一月十八日の北京放送で発表されたのである。

はたして今回の全国人民代表大会は、ほぼ予想されたとおり、「毛沢東以後」の時代への歴史的移行期に備えるために万全の体制を形成しようとしたものであったとみなすことができよう。もとより党・軍・政を貫く中国共産党の一元化指導体制の確立は、逆に「毛沢東以後」の時代への大きな不安を残すが、すくなくとも当面の「毛・周時代」の中国は、鄧小平―張春橋という後継布陣とともに、暫定的にはここによく政治的安定化を遂げたようである。しかも王洪文、江青、李德生、姚文元ら急進イデオログが国家体制のなかで位置を占めなかつたことにも示されるように、経済建設を当面の最大の国家目標とする中国の今日の基本方向が、総じて実務型の官僚体制を再整備させたのだといえよう。文革ラディカルの退潮、全人代への毛沢東の欠席などから毛沢東の指導力後退を予測する見方もあるが、今日の中国においては、すべての人びとが「毛沢東以後」の時代への歴史的移行期がすでに開幕したことを深刻に意識しているように思われ、そ

のことが「批林批孔」運動の当初の権力政治的性格を、一種のスコラ哲学的思想キャンベーンへと変質せしめたように――私が北京で購入した百種に近い「批林批孔」運動関係の煩瑣な小冊子類もそのことを示している――まさしく今日の国家体制を導き出したのではなからうか。

私は今回の訪中時に、マルタ共和国のミントフ首相と会見した毛主席をTVを見たが、やはりその老齢化はあらそえないように思う。それゆえの毛主席の行政的指導能力の後退は当然のことであつても、そのことが毛沢東の権威の低下を意味するものとは必ずしも思われず、むしろ、「毛沢東体制下の非毛沢東化」を徐々に推し進めつつ、毛沢東個人の指導能力の後退を補填すべき実務派官僚体制が今回の全人代によって整えられたと見るべきではなからうか。事態が平常化すればするほど実務官僚の壁の厚さが浮彫りされるものである。

そして、周恩来総理の政府活動報告にあつた、「人口が八億近くもあるようなわが国で人民の衣食にたいする基本的需要が保障された」という指摘こそ、中国民衆にとつてはなによりも重い意味をもつのであり、この点は八年ぶりの訪中による私の実感とも矛盾しない。こうして「政治第一」の中国社会は、「批林批孔」運動の鼓吹にもかかわらず、いまや次第に過去のものになりつつあるようであり、北京再訪による私の最大の発見もまたこの点にあつたような気がする。

中央公論新人賞小説募集

一 応募規定一

● 選考委員……………吉行淳之介

丸谷才一

河野多恵子

● 賞 金……………二十万円

● 当選作……………本誌昭和五十年十月号

に掲載する

一、応募作品……………新人の未発表小説原稿。ただし非商業雑誌に発表したことのある作品でもよい。

原稿には、住所、電話番号、本名、年齢、職業、略歴を明記すること

二、枚 数……………四百字詰原稿用紙百枚以内

三、締 切……………昭和五〇年六月三〇日

四、宛 先……………〒104 東京都 中央区 橋二一 中央公論社中央公論編集部 新人賞係宛

本誌、

● 応募作品は一切返却いたしません。

● 応募作品に関する問合せは応じません。

● 当選作の版權は小社に属します。

中央公論編集部

◇ 了すくざらんと

☆一年に一月月ぐらゐる雪山で滑りたいと考へ続けて二十年、現実はその理想を、新聞に載せる各地の積雪量を眺めて楽しむことを教えてくれた。そのときだけスキー場の気分が流れて、街の寒さを忘れる。(吉田)

☆テレビの歌番組の占拠率をみると、さすがに流行好きのばくもあきれはてる。歌謡曲ファンズだ。中野三三の歌に若者が、人生を感じなんというんだから、音痴中年は今のうちがなつておこら。(水口)

☆アメリカの日本占領政策解明に、西原の研究を発表されている竹前宗治氏の、皇政天皇制の成立過程についての論稿をおとどけします。複雑な原資料の整理、解説と格闘された氏に深く感謝いたします。(田中)

☆流行がいやなら不易に就けばよいが、不易に安住する訳にもいかないとなると流行遅れになる他なし。流行遅れは恥かしのひんがしだ。流行の支え役じゃないか。(松代)

☆ある日所角で、碧眼のいる狸軍票を見つけた。まぼこは出してくれたもの、そばに販売機があるのに、もの競の一言にガクッとした。古いを感じてしまった。(山形)

☆新幹線車内から電話をかける。遅延のため東京の通話が集まって回線があらず、十回近く試みてようやく通じた。奥中調剤方式で「嵐」の夢を實現した新幹線が、いかに時代精神の根本にふれる問題を扱うとき何をなすべきかは言えなくとも、何をなすべきでないかを説得的に追求できれば偉大な成功といふべきでしょう。本誌集はいずれもそういう力作で編集突進でした。(早川)

☆就職シーズンともなれば、大学付近のコピー店は、日頃は字賣帳の圖表で忙いらしい学生で大盛況。いっそのこと講義は全部やめて、年度初めに印刷物だけ配布するシステムに変えてしまえば……。(近藤)

編集後記

★女性のファッションだけでなく、珈琲館から炉ばな焼まで、アツという間に伝播する、ハイジと丸の内が連動する、瀬戸内海とマラッカ海峽が呼応する、こうしつたわれわれを取り巻く状況の不可思議さと不安の正体は何なのか、特集・情報衝撃と都市の不安」は、そうしつた課題で、昭和十六年生れから二十三年生れまでの新世代が取り組んだ労作集です。

★専門家としてはじめた三國鐵貫紀行を成し遂げた田嶋氏の生々しい報告、中国の権力構造の根幹を分析した竹内氏の力作を巻頭に、竹前氏の極秘文書を基にした占領政策の分析、東亜日報記者の緊迫したメッセージと、激変する状況への適応と、問題の重さ深さに対応する描がめ視点の確立に努めたつもりです。

★視界極度に不良の七十五年を本誌と共に歩んで下さるよう御支援お願い申し上げます。(粕谷)

中央公論

昭和五十年三月特大号◎
特価 三九〇円

編集者 粕谷 一希
発行者 高梨 茂
印刷所 大日本印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区永代二丁目一番地
電話・東京(五六一)五九二一

本誌掲載記事・写真等の無断転載を禁じます。

今月の言葉 清水幾太郎 (七)

風 政治不在の新年算 戸田栄輔 (七)

西 終りのない学費団交 尾形憲 (七)

東 馬拉ッカ海峡の怪 上野弘 (七)

●人物交差点 張春橋／桑原武夫／日野啓三／大山康晴 (一六)

モスタワウラバートル北京 三国縦貫記

(一六)

専門家として初めて三国縦貫紀行を成し遂げた筆者が三つの首都の生々しい表情を伝える最新報告

中嶋嶺雄

皇帝型権力と宰相型権力

(一六)

危惧された周恩来以下全容を現わした全国人民代表大会に示された新体制が語る中国の権力構造

竹内実

随筆

- やまびこ 湯川秀樹 (一六)
- 晴 着 内村直也 (一六)
- 国連に乗り込む 北沢洋子 (一六)
- 語楽教育 勝泉外吉 (一六)
- 不眠患者 保崎秀雄 (一六)
- 差別 古山高麗 (一六)

〔書評〕 飽の身身 上海時代 細谷千博 (一六)

特集情報衝撃と都市の不安

言葉はなせ意味を失ってゆくが

杉山光信 (一七)

情報氾濫が混乱と奇立ちしかもたらさない理由は

津村喬 (一八)

自警団にも米騒動の群衆にもなりうる、巨大な力を秘めた孤独な都市の顔

佐和隆光 (一〇六)

数と量の政治支配

樺山紘一 (一〇六)

説明のつかぬ混乱した経済現象を前に、今こそ認識の転換が必要とされる

都市はメディアである 樺山紘一 (一〇六)

象徴天皇制への軌跡

竹前栄治 (一〇七)

★ドキュメント 占領秘史★
極秘文書を駆使し現代史の空白部分を鮮かに解明

